

# 自衛隊内部資料『イラク復興支援活動行動史』より

2008 陸上幕僚監部

派遣準備から撤退に至るまでの活動の記録 2003-2006

## はじめに

表題通り、イラク特措法に基づく自衛隊イラク派兵の行動の総括と反省・教訓を導き出すための防衛省内部資料。当初大部分黒塗りで公開されたが、国会議員らの強い要求によって開示。

「復興支援」「給水活動」「人道援助」などとして、「非戦闘地域」に派遣されたはずの自衛隊が、実際には「戦場」「戦闘地域」を前提として対処していたことがわかる。

「非戦闘地域」は自衛隊をなんとしてもイラクに派遣するために小泉政権が作り出した造語。だれもそんなことを信じていない。身の危険に直面する自衛隊幹部と自衛隊員自身が戦場として捉え、その準備をし、現に緊迫した状況に直面したことを生々しく伝えている。

読めば読むほど、一人の戦死者も出さなかったのは奇跡だとわかる。

もう一つ重要な点は、自衛隊海外派兵を持続的・恒常的に行うために、すなわち日本が「戦争する国」「海外派兵国家」となるために何が必要かを提言する根拠となっていること。必要な装備や隊員の心構えはもちろん、「家族の意識改革」＝戦死の覚悟要求、海外補給基地の建設の必要、医官を大量に戦地に派遣した場合の国内医療体制、海外派兵を前提とした医療教育と実践、隊員の事故・犯罪時の対処、メディア対策等々。

統合幕僚長の発言等、明らかに制服組・海外派兵組の発言力は高まっている。

## (1) イラク派遣は軍事作戦を伴う海外派兵、「本当の軍事作戦」と総括。

軍事訓練を法案成立前にすでに始めていた。

「派遣準備から、イラクへの展開、指揮・幕僚活動、人事、情報、兵站、復興支援活動、広報・対外連絡調整、撤収まで、振り返ってみれば、イラク派遣は、派遣部隊と本国の陸幕・関係機関・部隊等、国家と陸上自衛隊の総力をあげて行われた、本当の軍事作戦であった」「軍事組織としての真価を問われた任務だった」「軍事組織による軍事作戦」 (二巻 巻頭言)

←「非戦闘地域」「復興支援」「給水活動」「人道援助」と著しく乖離。

・自衛隊のとらえ方――「対テロ戦」への参加。

いくら「復興支援」「人道援助」と叫ぼうが、いつどこで攻撃を受けるかわからない。攻撃を受ければ、そこが「戦闘地域」になる。当然銃撃戦や戦闘が想定される。

「派遣される立場としては、銃声が一発でも聞こえれば、砲弾が一発でも落ちてくる状態であれば、備えは同じです。対テロ戦では、いつ何が起きるかわかりません。」

自衛隊は「実戦」を想定して派遣に臨んだ。

## (2) 「IQPJ」(イラクプロジェクト)の発足と派遣準備――戦闘訓練

・イラク特措法国会成立前の2003/06には陸上幕僚監部内に「IQPJ」が発足し準備を開始した。

・装備品について(装備部の)限定された関係者による先行的な検討が開始された。

P84・派遣隊員に対する「教育訓練」について 「教育訓練課目」「訓練に必要な弾薬の算定」「武器使用に関する訓練状況集」などの検討を開始。

[訓練内容]

北富士演習場(山梨県)内に、「模擬サマーワ宿営地」が設置され、実戦的な訓練が繰り返された。  
2-P47・「至近距離射撃と制圧射撃を重点的に錬成して、射撃に対する自信を付与」

2-P50・「約二百名規模の仮想敵を使用したデモ対処訓練および VBIED(自動車による自爆攻撃)対処訓練を通じて、警備中隊の行動を総合的に演練

・「IED(仕掛け爆弾)(即席爆発装置)(手製爆弾)・狙撃犯の危険が混在する高ストレス及び劣悪環境下における連続状況を克服したことにより、任務遂行の自信を大いに得ることができた」

#### ●至近距離射撃

市街地の建物や物陰から仕掛けてくる攻撃に対応して、狙いを定める間もなく、素早く至近距離にいる敵を撃つ射撃

「上官に『撃たなければ、こっちが殺やられるぞ』と言われ、訓練を重ねるごとに対応する時間も短くなって自信がついた。体で覚えてしまえば、考える前に引き金を引けるようになる。そういう状態になるまで繰り返し訓練をして、体に覚えさせた。」(朝日新聞)

武器使用基準(急迫不正の侵害があった場合の「正当防衛と「緊急避難」)と上官の命令の必要は建前に過ぎなかった

P118P119 法務・隊員に対して訓練を徹底した後、最終的には「危ないと思ったら撃て」との指導をした指揮官が多かった

P119 武器使用等の正当性(法務)のあり方 (帰国後、「殺人罪」などに問われないような対策も講じていた。)

#### ●制圧射撃も重点的に錬成した

間断のない連続射撃を加え、弾幕を張って敵の自由行動を阻止する射撃方法のこと

市街地でゲリラの攻撃を受け、敵の戦闘員を目視で確認できない場合、ひたすらその方向に向かって機関銃を撃って敵の戦闘力の発揮を妨害する

要するに無差別銃撃。

### (3) 保有武器と「正当防衛・緊急避難」の拡大解釈

・小銃や拳銃のほか、機関銃、そして無反動砲や対戦車弾まで持っていった

(「一丁の機関銃」の持つ意味 1994 現地で装甲車にセットすればイメージよりずっと大きい立派な武器に変身する。装備である武器)

・今回のイラク派遣では安全確保に必要な装備は持ち込むことができた

・正当防衛・緊急避難の武器使用では対応できない不測事態に自衛隊は「拡大解釈」で対応しようとした。

P187・『駆けつけ警護』として拉致された隊員の捜索の際に攻撃を受ける等の危険が生じた場合は、自衛のための武器使用が解釈上可能となった

(武器を用いた奪還作戦はできないが、武器を持って捜索し、そこで攻撃を受けた場合は反撃して救出することはできるという理屈)

(他国の軍を救出する場合は、情報収集の名目で現場に駆け付け、あえて巻き込まれるという状況を作り出すことで救援するつもりだった。その代わりに、日本の法律で裁かれるのであれば喜んで裁かれてやろう。)

・駆けつけ警護によって自衛隊は武装勢力との戦闘任務に本格的に踏み出すことになる。戦地の現実に行動や法律を合わせていけば、自衛隊は必然的に「戦争」(ゲリラとの非正規戦)に突入していくことになる。

#### (4) 多国籍軍との一体化

自衛隊が初めて多国籍軍に参加した。

「他国の武力行使と一体化するもので憲法上許されない」

「自衛隊は多国籍軍司令部と連絡・調整はするが指揮下には入らない」

実態は

- ・「陸自は、脅威に対応しつつムサンナ県の人道復興支援活動を整齐と行うため・前半は英蘭軍と、後半は英豪と連合作戦を実施した」
- ・様々な事態に対処する共同訓練を積み重ねた。
- ・陸自がロケット弾や IED などによる攻撃を受けたときは、TFM に速やかにオペレーション『サムライ』を通報、共通の SOP(標準作戦手順)も作成した。
- ・米軍をはじめとする多国籍軍が実施している治安回復・維持のための作戦と人道復興支援を目的とする活動は、相互に作用しつつその成果を蓄積すべき性格

(P76)・MSR(補給幹線)を使用した陸上輸送間の警備は、派遣当初から輸送役務企業が契約した民間警備会社と英軍司令官の統制による派遣部隊警備中隊が実施  
(軍事補給物資の輸送にあたっては各国軍隊が自ら警備するというルール)

イラク派遣の基本計画と実施要項には、民間運送会社を陸自が警護する活動は含まれていなかった  
「道案内」をするという名目で、民間運送会社のコンボイの前後に陸自の装甲車をつけて実質的に警護した  
警護に当たっては、多国籍師団の英軍司令官の「統制」を受けた

実際には「裏技」を使ってでも多国籍軍司令官の「統制」の下で行動せざるを得ない。

(P74P77)※イラクでの輸送業務に日本の民間企業が参加。

#### (5) 軍事制圧・住民支配の一環としての人道復興支援

・人道復興支援があつてこそ「現地住民の民心の獲得」ができ治安回復・維持の作戦もうまくいく

・陸自は多国籍軍の連合作戦の中で CMO の役割を果たした。  
civil military operation 軍事作戦を円滑に進めるための民事活動

・そのために旧日本軍の戦術を研究。特に日本軍北支那方面軍による中国人民掃討作戦。いわゆる三光作戦はこの華北（中国北部）で集中的に展開された。

「民心収攬」―― 現地住民の心をつかむことが最も重要、そのためにはお金や物の提供が有効、「宣撫」―― つまり部隊の宣伝に努めること、「帰順」―― 住民を従わせるために職を与えること、等の重要性。それは「帰順」しない住民の殺害とセット。

・イラクの多国籍軍は、戦争を起こした当事者である米軍が主導しており、文字通りの「占領軍」人道復興支援であっても、多国籍軍が行う軍事作戦の中のワンピース実施するにはリスクがつきまとう

陸自は「民心の獲得」に力を入れた

P115・1 次隊で実施された SU(スーパーウグイス)作戦もまた地域住民の心情に訴えかける優れた施策。

## (6) 自衛隊が実際に直面した緊急事態

・迫撃砲攻撃は当初から予期し対策を検討していたが、2003 年 12 月以降は迫撃砲攻撃対策検討グループを立ち上げ、本格的な検討を開始した。

P187・実際に派遣期間中、迫撃砲・ロケット弾攻撃は計十回以上あった。  
宿営地内に着弾し、実際に被害が発生したケースもあった。

・宿営地の外でも、陸自の車列や一緒に走行していた豪軍の装甲車、または陸自の補給物資を輸送する民間トラックの車列が IED による攻撃を受けた。

・2005/12/04 ルメイサ養護施設の竣工式  
外国軍隊の撤退を求める群衆に囲まれ、投石を受ける

「発端は、会場のそばで起きた反米指導者サドル師派と、自衛隊を警護していた豪州軍の銃撃戦だった。サドル師派は頻繁に多国籍軍を襲撃し、自衛隊も「占領軍」と敵視した。会場内の陸自幹部たちは「ただ事ではすまない」と青ざめた。

「銃撃戦に続き「ノー・ジャパン」などと抗議しながら押し寄せた群衆の渦は、あっという間に 100 人前後に膨らんだ。幹部らは建物に閉じ込められ、外で警備にあたっていた十数人の隊員は群衆に包囲された。車両に石を投げつける男、ボンネットに飛び乗って騒ぐ男、銃床で車の窓をたたき割ろうとする男までいた。」

「どうすべきかわからず、みんな右往左往していた」と当時の隊員は話す。

P118・群衆による抗議行動、投石等を受け、車両のバックミラー等が破壊された。この際、小隊長以下警備小隊の隊員は、投石する群衆の他に銃を保持しているものを発見し、これに特に注意を払

う等、的確に行動した。銃を保持している者は、部隊に銃口を向けることはなかったため、弾薬装填は実施せず。

「ここで1発撃てば自衛隊は全滅する」。どの隊員も、1発の警告が全面的な銃撃戦につながる恐怖を覚えた。「撃つより撃たれよう」と覚悟した隊員もいた。結局、地元のイラク人に逃げ道を作ってもらい窮地を脱することができた。

「当時、官房副長官補だった柳沢協二氏は「もしあそこで撃っていたら銃撃戦になっていた。一番やばい事件だった」と話す。別の官邸幹部も「自衛隊員が引き金に指をあてるところまで行った事件だったと聞いた」。(朝日新聞)

一歩間違えれば銃撃戦 市民が犠牲に 殺す殺される事態に。

## (7) 自衛隊員の PTSD対策

イラク派遣が隊員たちに PTSD を発症させるリスクについて、自衛隊は派遣前から認識していた。

衛生検討グループ 予防及び対処法の検討

陸上自衛隊の中でも精神的に精強な隊員が選考された。

陸自 21名 航空自衛隊 8名が自殺

・ 今後は、一般的に約二割の隊員にはストレス傾向のあることを前提として精神面のフォローが必要である

(アメリカでは帰還兵の約五人に一人が PTSD 心的外傷後ストレス障害を患い、退役軍人の自殺は一日平均二十二人に及んでいる)

## (8) 医療の戦地派遣の検討 - 戦傷者の救護、後送病院、野戦病院を視野

準備した活動基盤 P42

- ・ 衛生派遣の枠組み 現地医務室の「医療レベル」と「不測事態への対応」
- ・ 自己完結性を追求すべく「全身麻酔下での外科手術」が可能な体制を保持
- ・ 後送基準として入室日数が7日を超える患者等と決定 衛生ヘリの派遣は見送られた
- ・ 衛生隊 40名規模 医官 10名の派遣は官邸の強い意向

- ・ 2004.1以降 現地調整による衛生体制を確立

サマーワでの不測事態対処として、蘭軍との共同訓練を・・・実施・・・サマーワからの緊急患者ヘリ後送、クウェートでの後送病院や米軍野戦病院等の利用について、多国籍軍及びクウェート保健局と調整

・ 2003.11頃 P43 現地での不測事態対処さらには厳しい環境を考慮し、・・・可及的速やかに初期外科能力を確保するため、可搬的シェルターの調達及びその空輸が必要と判断。

## 教訓 P44

- ・派遣形態が不明確な場合や不測事態への対応を要する任務の場合には、救急救命機能や初期外科治療能力を重視した編成及び装備の保持が必要
- ・医官派遣数は、P45・・・国内における病院運営の困難化や医官退職問題等の状況変化から検討が必要・・・今回は医官要員確保のため、地区病院の診療科を一部閉鎖する状況も生じたことから、今後は、予備自衛官(医者)等の活用についても検討が必要

## 提言 P47

- ・自隊救護における高い医療レベルの保持

イラク派遣のように・・・緊急外科手術が可能な高い医療レベルを発揮できる体制(編成・装備)が必要である。

P96 P98 P99-P100

---

## 目次

『イラク復興支援活動行動史』

2008 陸上幕僚監部

書の構成 1編 陸上幕僚監部が実施した施策

2編 方面隊以下における各機能別の部隊の活動状況及び教訓・提言

区分 総説・派遣準備間・実施間・撤収

機能 人事・警務・衛生メンタルヘルス・会計・広報・民事・法務・情報・通信・  
兵站(兵站支援・装備)・運用・教育訓練・監察・教訓業務

各項目に陸幕の準備または実施した施策、教訓および提言を記載

※本文は辻元清美議員のホームページに掲載されています。

<http://www.kiyomi.gr.jp/blog/5969/>

【完全版】イラク復興支援活動行動史(全188ページ)

イラク復興支援活動行動史完全版1(7.5MB)

イラク復興支援活動行動史完全版2(8.1MB)

【完全版】イラク復興支援活動行動史 第2編(全235ページ)

イラク復興支援活動行動史第2編完全版1(5.9MB)

イラク復興支援活動行動史第2編完全版2(3.2MB)

イラク復興支援活動行動史第2編完全版3(3.2MB)